

氏名	林 春伽
学位の種類	博士（文学）
学位記の番号	甲第234号
学位授与年月日	2021（令和3）年3月20日
学位授与の要件	学位規則第5条第1項該当
学位論文題目	「この島でいかに生きるか」に着目した離島観光に関する民族誌的研究—愛知県知多郡南知多町日間賀島を事例として—
論文審査委員	主査 中西裕二（相関文化論専攻 教授） 副査 杉山直子（相関文化論専攻 教授） 三田明弘（相関文化論専攻 教授） 鈴木涼太郎（獨協大学 教授）

論文の内容の要旨

本博士論文は、「名古屋から一番近い離島」と言われる観光地日間賀島を調査地とし、「島の中でいかにして生きるか」に着目して行った離島観光における民族誌的・観光人類学的研究である。調査方法はフィールドワークと文献調査である。

また、本論文では、観光現象を1つの文化的・社会的要素として位置づけ、観光研究に対する人類学的手法を使った研究を行い、より立体的な離島観光の実態を把握することを試みた。そのため、本研究では、島の中の観光現象のみを切り取り記述する方法は行わず、現地の観光の実態に寄り添いながら、島で生きる人々の生活に着目してフィールドワークを行った。

本論文は、フィールドワークをもとに研究を試みたが、当地における観光現象のみを観光地から断絶的に抽出し研究することのない多角的な領域横断的研究を試みた。さらに、本研究データは、COVID-19拡大以前の観光地のデータを民族誌として記述・分析を行った。今後の研究において、感染症拡大以前/以後の比較観光研究に使用するデータの蓄積に貢献する研究という立ち位置でもある。

第1章では、本研究の研究目的、領域横断的研究を試みるという本研究の立ち位置、フィールドワークという研究手法の使用理由と本研究の意義を述べた。

第2章は調査地概要であり、調査地の地理情報と交通網、観光客数、宿泊地数推移を確認した。現在、小さな離島にも関わらず、旅館・ホテル・民宿を合計すると60軒近くになる。これは、島に水道管が普及し、生活インフラが整ってから増加したことが明らかになった。さらに、観光客数は近年横ばいであり安定している。

第3章では、当地における女性の労働変化を第1期から第5期にわけ時系列的に整理した。その結果、女性は島内観光が成立する以前から、様々な生業を組み合わせながら労働して

いたと明らかになる。また、時代とともに島内の商売が変化する中で、女性の労働は、時代の流れと共ににより稼ぎが良く、現金収入を得ることが出来る商売へと移り変わっていると指摘した。さらに、島内が観光地として成立したことにより、島内の様々な商売が観光関連産業化し拡大することで島全体の経済活動が機能していることが明らかとなった。

第4章ではANTを用い、観光地形成について考察を行った。観光資源が島内にあるが、島外にあるが、元は観光の為の設備でなかろうが、観光の役に立ち、観光資源として機能すると、観光資源の結びつきや関係性（紐帯関係）の中で、観光地は成立し、観光地として生き残ることが出来ると述べた。その結びつきや関係性は、その時々で強固あるいは弱体化し、分裂したり、関係性を復活させたりと極めて緩やかな存在であるとも指摘した。換言すると、緩やかな関係性であるがゆえに、観光地として一定の成果を上げつつ当地は成立していると述べた。

第5章では、人間の経済に着目し、島内で行われる再分配や互酬性、自給の4つの視点をもとに分析を試みた。その結果、島民の生活に埋め込まれた経済を背景に、観光業という市場経済活動が成立していることを論じた。再配分や互酬性、自給といった必ずしも貨幣を媒介としない経済的関係性の形成の先に、観光客との貨幣を媒介とする観光業という経済活動があると述べた。

第6章では、島内における後継者の役割と意義について、フィールドワークにより得た後継者に関する情報をもとに考察した。その際R.レッドフィールドの「大伝統/小伝統」を採用し、インターフェースという役割を設定し、後継者は島外と島内を繋ぎ、または断絶を防ぐ役割を有することを指摘した。さらに、経済活動における生業的意義、地域内での社会的意義、家族に係わる個人的意義という3つの視点から、島という大きい単位や単なる事業後継者というだけではなく、家族や親子間の孤独感を解消し、島での生活を安定させるための存在でもあるとし、多様な後継者の意義を論じた。

第7章では、本論文全体の結論を初めに述べた。当地で生活していくためには、島内でできる市場経済活動で現金収入を得つつ、経済的関係性も形成し、後継者も確保し、自らの生活が圧迫されない程度に島の観光が発展することが必要である。本研究で取り扱ったテーマは各々が断絶しているのではなく、有機的に絡まり合っており島での生活という1つの形を成していると筆者は論じた。「いかに生きようか」という自己問答から離島での生活をより良くするための具体的な策を、資源に限りのある島の中で島民が実践した結果、現在の日間賀島は成立していると考えられる。

加えて、調査地が観光地として成立する理由として、調査地が観光地として成立した理由は、海つきの村特有の複合生業思考が島民の意識にあり、島の中で生きて行くための生業の一種として島民が観光業を選択したからと述べた。また、当地ではブランド力の高い観光資源が島内に存在せずとも、様々なものが観光資源として機能していると論じた。

また、「観光」とは何かという節では、観光産業とは社会の中の関わり方や関係性により規定されており、「観光地を創ろう」として島の観光を形成したわけではなく、自らが生きて行く環境に適応した結果、観光が成立したと指摘した。そして、観光地形成において重要なことは、当該地方の社会が破綻しているのならば住民にそれを立て直す気があるのか、当該地方で「ここで生きて行く」意思が住民にあるか否かであると述べた。

最後に、観光の持続可能性について、離島観光の持続可能性を足掛かりにするならば、

観光の持続可能性は市場の経済問題ではなく、社会問題の一種として取り扱えると論じた。通常、観光研究は経済学主体で行われるが、統計データでは測れない人間の感情や職場の人間関係、社会関係資本、人的資源の確保が限られた資源を活用せざるを得ない観光現場では重要な要因であることを指摘した。

今後の課題として、①調査を継続し領域横断研究分野以外の研究視野や理論を有機的に組み合わせさらなる調査研究を行うこと、②新型コロナウイルス感染症拡大後の観光業と地域組織の持続性について検討すること、③今回取り扱わなかった島内の観光イベントやお祭りの変化などの調査研究も加え、さらに民族誌としての質を高めること、④感染症拡大による観光地での観光業の変化や今後のアフターコロナの観光や地域の持続可能性について調査することの以上4点を課題とした。

論文審査結果の要旨

I. 論文の概要

本博士論文は、現在は旅館・民宿が多く観光業を生業の一つとする愛知県知多郡日間賀島をフィールドに、当地の生活と観光の関係に関する文化人類学的な現地調査（フィールドワーク）をおこない、その時得られたデータ、文献資料から、現地の文化と観光に関するデータを民族誌（ethnography）という形式でまとめ、同時に文化人類学的・民俗学的分析をおこなったものである。

第1章では、研究目的、フィールドワークという研究手法の意義を述べ、第2章は、調査地の概要を示し、調査地の地理情報と交通網、観光客数、宿泊地数推移を確認している。

第3章では、日間賀島における近代以降の女性の労働変遷を5期に分け、その特徴を聞き取りにより明らかとした。さらに、民俗学における複合生業論を基礎に、島内観光の成立を、海付きの村特有の労働意識と現金収入確保の手段を獲得するための女性たちの柔軟な観光業への適応という2つの視点より論じた。

第4章では文化人類学・社会学で主に用いられている Actor Network Theory (ANT) を用い、観光地形成について考察を行った。観光資源が島内にあろうが、島外にあろうが、元は観光のための設備でなかろうが、観光の役に立ち、観光資源として機能すると、観光資源の結びつきや関係性（第4章では紐帯関係と述べた）の中で観光地は成立し、観光地として生き残ることが出来ると述べた。

第5章では、島内で行われる経済活動を経済人類学の概念で整理した上で、再分配や互酬性、自給という島民の生活に「埋め込まれた」経済を背景に、観光業という市場経済活動が成立していることを論じた。これは、生活と労働の区分が曖昧であり、島内の経済的関係性も必ずしも貨幣を媒介しないという特徴があるため、観光業という市場経済に従事しながらも、この、生活に「埋め込まれた」経済の持つ重要性を分析している。

第6章では、フィールドワークより得られた宿泊業等の観光業の後継者に関する情報をもとに、島内における後継者の役割と意義について考察した。その際、R. レッドフィールドの「大伝統／小伝統」の概念、その中で登場するインターフェースという概念を援用

し、後継者は島外と島内を繋ぎ、島外の情報を島内へ伝達し、また断絶を防ぐ様々な役割を有することを指摘した。とくに、島出身、また結婚で島に渡る女性たちが、このインターフェースの役割を果たしていることを論じた。

最後に、本研究の成果をもとに、①調査地が観光地として成立する理由、②「観光」とは何か、③観光の持続可能性、の3つの視点からさらに考察を深めた。とくに③の点で筆者は、観光の持続可能性は市場の経済問題ではなく、社会問題の一種として取り扱えると指摘した。観光の持続可能性については、現在の日本では、観光業者・観光研究者双方で議論される主題であるが、日間賀島における観光の持続可能性とは、島内の社会の持続可能性と同義であると筆者は指摘している。

このように本論は、日間賀島を具体的事例とし、その島内の小規模宿泊業を主とする観光地の現状を記述し、そこで見られる諸事象を文化人類学・民俗学な枠組みから分析した民族誌である。このような民族誌的研究は極めて少なく、本論は日本の観光地研究において極めて重要な業績となることが予想される。

II. 審査結果報告

本論に関する公開審査会は2021年1月9日(土)、11:00~12:30に行われ、新型コロナウイルス感染拡大の影響により、zoomを用いた公開審査会となった。本審査会には、学位申請者の林春伽、論文主査の中西裕二(人間社会研究科関連文化論専攻教授)、そして副査の杉山直子・同専攻教授、三田明弘・同専攻教授、そして外部副査の鈴木涼太郎・獨協大学外国語学部教授が参加した。また、学外からの参加者として、韓準祐・多摩大学グローバルスタディ学部専任講師、丸山宗志・松本大学総合経営学部観光ホスピタリティ学科専任講師、佐野浩祥・東洋大学国際観光学部国際観光学科教授、が参加し、活発な質疑応答が交わされた。

本論文の位置づけについては、外部副査からの的確なコメントが得られた。従来の観光地研究では、産業としての観光業・観光振興に焦点を当てた社会経済的な研究、そしてフィールドの文化や生活に軸足を置いた観光人類学的な研究に二分される傾向にあり、その両者には接点が少ないのが特徴であったが、林の研究は、その両者を接合させた民族誌となっており、日本においては極めて希少で重要な研究である、との指摘がなされた。

本論文は、方法論的には、文化人類学・民俗学を軸としているが、登場する方法論は民俗学における複合生業論、Actor Network Theory、文化人類学における urban/ruralの連続と非連続を扱ったレッドフィールドの理論、経済人類学など多岐に亘る。このような記述と分析のスタイルは、文化人類学ではしばしば見られるもので、フィールドデータに素直に向き合った結果、その対象を記述する際に最も適当な分析枠組みを、筆者の専門領域である文化人類学・民俗学の中から選び使用するという方法である。これを可能にするには、フィールドの人々との信頼関係の確立、深い観察眼、現地の日常に溶け込む柔軟性が必要で、そこから多様な情報を得る必要があるが、筆者の論文から非常に充実したフィールドワークが行われたことが分かる。

逆に、観光学の側から見ると、例えば第4章における観光資源といった概念の使用法に、社会科学系の観光学のそれと若干の乖離が見られるとの指摘があった。観光学は、観光現象を対象とした人文・社会・自然科学の複合的な領域であるため、書き手が立脚する方法

論により概念規定のズレが生じる可能性があり、今後、文化人類学者・民俗学者でありつつ観光研究者として研究を進める際、この点にも留意し調査研究を進める点が必要と思われる。

もう一点、副査より重要な指摘がなされた。本論文が描く日間賀島の観光の姿が、従来我々が考える観光地像とは異なるが、そこにジェンダーの視点は関係していないか、という指摘である。本論で指摘されている通り、日間賀島の観光の世界は「女性の世界」であり、筆者が現地で世話になった方々、そしてインフォーマントの多くも女性である。筆者の記述スタイルは、本論文のタイトルにあるように、一貫して「この島で生きる人々」を描くという姿勢であり、その軸は最後までブレない。それが、男性中心の日本の地域社会の記述とは異なる、筆者独特のフィールドの記述と関係するよう見える。今後研究を進める中で、この点については主題化した上で、新たな考察を進めて欲しい。

最後に、本論文の優れた点を改めてまとめ、今後の課題について指摘したい。本論文は一見すると観光地研究という枠内に位置づけられるように見えるが、当地の観光化は島民が「この島で生きる」手段として、観光業を生業の一つに組み入れたという、島民の主体性に着目している点に特徴があり、それが本論文を単なる観光地研究の枠を超えた良質の民族誌としている。その着眼点を活かし、民俗学における複合生業論の援用（第3章）、島民の単なる生活インフラが観光化のエージェンシーとなった点（第4章）、経済活動としての観光業も現地の「埋め込まれた」経済と不可分の関係にある点（第5章）、婚姻により島の人間になった女性の、外部とのインターフェースの役割（第6章）、といった、この島の人々の「生きる方法」が見事に描き出せている。文化人類学・民俗学は似て非なる学問領域ではあるが、文化概念も民俗概念も、その根底にはa way of life、つまり生活様式、もう少しかみ砕けば現地の人々の生き方が含意されている。本論文は、その意味でも「観光」という枠を超えた良質な民族誌ということができる。

本論文は3年間で書き上げられたため、先行研究のまとめ、観光的な概念とのズレなど、もう少し時間をかけ考察を深めるべき箇所もある。それらの課題はあるものの、本論文は博士学位論文として十分なレベルに達しており、主査・副査・外部副査の一致した意見として、本論文は博士論文に値するという結論に達した次第である。

以上